

安徽の辛亥革命覚書き

里 見 信 也

はじめに

一、光復への前奏

二、光復の経緯

三、都督問題に関して

むすびにかえて

はじめに

安徽省は、辛亥革命の先導役をつとめた湖北や上海・南京に囲まれ、革命運動の進展にとって重要な意味をもつた地域である。そのひとつは、同盟会が会党蜂起より新軍蜂起へと革命方略を転換した最初の武装蜂起が、この安徽省で起こったことからわかる。

いままでにも、辛亥革命を地域ごとにとりあげた研究は少なくない。その研究を通していえることは、革命における主体勢力の問題をはじめとし、各地域は全く異なつたかたちで光復を実現させたことである。このことは、辛

辛亥革命が非常に複雑な過程をたどったことを示すものであり、それ故に、一省規模での辛亥革命からは、ただちに辛亥革命の全体像を把握することは難しいし、誤謬も生みやすい。むしろ、地方の辛亥革命をより多く分析し、辛亥革命の多様なあり様を明らかにすることによって、はじめて辛亥革命の全体像に迫り得ると思われる。その意味から、現在にいたるまで研究成果のない安徽省の辛亥革命の動向を分析することは、辛亥革命の実像にせまる一類型となるであろう。

ここでは、安徽の革命運動の素描を通して、革命組織の有機的な統一を不可能にした原因の究明を試みた。なぜなら、組織基盤の確立こそが、革命の成就・国家統一に向けての重大な要素を構成すると考えたからである。

一 光復への前奏

安徽省における革命活動の中心となったのは、安慶と蕪湖である。安慶は軍・政の要地であり、一方、蕪湖は一八七七年に安徽省ではじめて開港された商業都市であった。^①したがって両地域における革命の展開には差異がある。とりわけ、革命宣伝にとって地の利のあったのは蕪湖で、安徽における最初の革命勃発地となった。その中心となったのは安徽公学である。安徽公学は、もとは安徽旅湘公学と呼ばれ、^②李光炯が長沙に建てたものであったが、一九〇四年、蕪湖に移された。当時、安徽公学に招請された教員には黃興・趙声・劉師培・陳独秀・陶成章・蘇曼殊らがあり、辛亥革命期に異彩をはなつた面々である。この安徽公学が安徽革命の温床と呼ばれるゆえんである。^③

さらに、一九〇五年八月、東京に同盟会が成立すると、蕪湖は安慶・上海・南京などの地域との連絡点となった。一九〇五年の冬には、同盟会安徽省分会會長吳春陽が日本から帰り、安徽公学内で革命を鼓吹し、革命工作を行ない、常恒芳や劉文典ら多数の学生を同盟会員として吸収した。^{④⑤}

一九〇四年二月、蕪湖で陳独秀による『安徽俗話報』が創刊され、時を同じくして岳王会が成立したことも、安徽における革命活動を活発化させることになった。岳王会とは南宗の武將・岳飛に由来する革命組織で、会長を陳独秀、南京分部長を柏文蔚、安慶分部長を常恒芳とし、本部を蕪湖においた。成立当時の会員は二、三十人程度であったが、安慶での常恒芳の活動を中心に、安慶練軍武備学堂の学生や安徽新軍第二標第三營の兵士も多数参加するようになる。一九〇八年の安慶馬砲營蜂起を発動した熊成基や範伝甲・張勁夫・薛哲、一九一〇年の広州（広東新軍）蜂起に殉死した倪映典、一九一一年の黃花崗七十二烈士の一人に数えられる宋玉林らもすべて岳王会の会員であった。⁽⁸⁾

安徽公学・岳王会以外にも、この時期には各地に多数の革命団体が組織された。（別表1）⁽⁹⁾

このように各学校でおこなわれた革命の教育と工作を通して、それらがやがては一九〇七年の徐錫麟蜂起および一九〇八年の熊成基蜂起を引き起こすことになった。ここで両武装蜂起について簡単に触れ、それが失敗するにいたった原因を明らかにしておきたい。

徐錫麟⁽¹⁰⁾字は伯蓀、浙江紹興の人で、光復会の中心的存在であった。一九〇五年、日本へ留学したが、翌年には帰国し、捐納によって安徽試用道となった。叔父が山西巡撫であったことから、安徽巡撫恩銘の信任を得るようになる。そして彼は、安徽巡警学堂兼安徽巡警処の会弁に任ぜられた。これは徐錫麟をして、革命をもっと容易に達成できる環境においたといえる。学堂にあって徐は、折りにふれ学生たちに国内外の厳しい情勢や国家・民族の危機を訴え、それを打開するために反清革命こそが必要であると説いた。この影響を受けた多くの学生たちもまた、卒業とともに入営し、革命の予備軍となった。

徐は一九〇七年七月、巡警学堂の卒業式典に蜂起することを決めた。学堂の学生二百名だけでは足りないと考え、

別表 1

	組織・学堂名	創立時期	組織者	備 考
蕪湖	安 徽 公 学	1904	李光炯	安徽革命の拠点、陳独秀・柏文蔚も教鞭を執る。 南京・安慶に分部をおき、柏文蔚・常恒芳が分部長を務めた。
	安徽公立速成師範学堂	1905	房秩伍	
	岳 王 会	1905	陳独秀	
寿州	養 蒙 学 堂 苻 西 学 堂 信 義 学 堂	1906	孫毓筠 李蘭齋 張匯滔	同盟会東京本部より派遣された張匯滔らによって設立、実質的には同盟会支部として機能、翌年寿州農会と改組。
合肥	識 字 義 塾	1907	吳春陽	“開通民智、改変風氣”を目的として。 堂長の吳春陽をはじめとして教師は全員同盟会員であった。 同盟会員が中心で、学会名を用いたが実際は合肥における革命派の中核であった。
	城 西 小 学 城 西 書 学 堂		吳春陽 吳春陽 吳春陽	
	模 範 小 学 堂 速 成 師 範 班 合 肥 学 会		吳春陽 吳春陽 吳春陽	
	暑期學術研究所 我 們 的 学 会		吳春陽 吳春陽	
安慶	安慶尚志学堂	1905	馮韜卿	初代堂長は鄭繩侯、安慶における革命派の活動基地。 安慶光復の時には、尚志学堂・測繪学堂および陸軍小学の学生が韓衍の“青年軍”の中核を担う。 “讀書会”と命名するも実際は革命の連絡・宣伝の場所であった。 1902年、陳独秀らにより安徽革命の起点ともいえる演説が行われた場所である。
	陸 軍 小 学	1908	韓 衍	
	測 繪 学 堂 維 新 書 会 安慶蔵書楼			
桐城	崇 美 学 堂 桐 城 中 学		潘贊華 吳汝綸	表面上は教育の振興を唱えたが、実際は、秘密結社として機能した。 房秩伍・吳守一・史恕卿らが教員を務め、反封建の啓蒙運動を展開した。
懷遠	養 正 学 堂 萃 華 学 堂			
六安	講 学 会			

漢人標統胡永奎の率いる安徽新軍第六十一標の兵士たちに革命への参加を働きかけ、標統の理解を得た。七月六日、午前八時より式典が行なわれ、安徽巡撫恩銘をはじめとする官僚が参列した。式典が進み、行礼の行進がはじまったとき、徐は恩銘に銃弾をあげてて拳兵した。ただちに、弾薬保管庫を占領したが、鍵がかけられていたため、弾薬を手にすることができなかった。また、城外に待機していた新軍も城門を開けることができず、呼応に失敗し、蜂起は瞬く間に鎮定された。徐は捕えられ、すぐに処刑された。彼は次のような辞世の言葉を残して後世に革命を托した。

われ革命に参加して以来、死をみることに帰すがごとし。いまここに死するは、われ徐錫麟ただ一人なれど、以後百千の徐錫麟が立ちて革命を起こすであらう。⁽¹²⁾

続いて安慶馬砲營蜂起、いわゆる熊成基蜂起が起こった。これは清末の革命運動のなかで起こった最初の大規模な新軍の蜂起である。

熊成基⁽¹³⁾、字は味根、江蘇揚州府甘泉県の人。熊は安慶練軍武備学堂に入り、ついで南京砲兵速成学堂で学び、卒業後は再び安慶にもどり、砲兵隊官に任ぜられた。武備学堂時代に、同学の柏文蔚・鄭芳蓀、安慶陸軍常備營の範伝甲・張勁夫らと岳王会に参加し、学内で『猛回頭』・『警世鐘』などを散布して革命を宣伝した。⁽¹⁴⁾

徐錫麟による蜂起の失敗を目のあたりにし、これに憤慨した熊成基と範伝甲は、安慶で再び蜂起することを計画した。時に岳王会員倪映典が南京より馬兵營管帯として赴任してきた。その倪を推して統領とし、計画の具体化をはかったが、安徽巡撫朱家宝の探知されるところとなり、計画は失敗に終わり、倪は罷免された。

一九〇八年十一月、清朝政府は安徽省太湖で、南洋各鎮の会操を命じた。そこで熊成基らは早速会議を開き、会操の時に蜂起することを決定した。熊を総指揮とし、第六十一標第三營管帯冷遜を全協の総指令とし、第六十二標

第二營管帶薛哲を副指令とした。工程營は範伝甲が、砲營は熊成基がそれぞれの營の責任を負い、準備を整えた。しかしながら、清朝陸軍部はいち早くその不穩な動きを察知し、安徽巡撫朱家宝に電報を發し、第六十一・六十二標の秋操への参加を見合わせるよう連絡したため、この計画も実行できなかつた。そこであらためて、熊の掌握下にある馬營・砲營あわせておよそ千余名からなる兵營を主力として、先ず安慶において挙兵し、その後、太湖で会操中の新軍と会合して蜂起することを決定した。ときあたかも十一月十四日に光緒帝が、十五日には西太后が相繼いで死去したとのニュースが伝わり、熊らは急遽この機会に乗じて蜂起することにした。

一九〇八年十一月十九日の會議で、熊を總司令とし、城外で馬・砲營の千余人が挙兵し、これに薛哲が城内で呼応するという蜂起計画内容を決めた。作戰行動を「作戰密令十三ヶ条」⁽¹⁶⁾としてまとめた。当日の午後九時、玉虹門外と北門外の馬營が一斉に蜂起、張烈・田激揚・同正鋒らは馬營全体の人馬を率いてただちに城北に向かった。同時に熊成基指揮下の砲營も正目張鴻堯、士兵の黃節らに率いられ、全兵城北へと進軍を開始した。両營は会すると、北門からおよそ五里離れた菱湖嘴の彈藥庫へ向かい、彈藥を奪い、改めて北門に転じた。途中、測繪學堂の學生も続々と革命軍に加わつたことによつて、革命軍側の志気はさらに高まり、破竹の勢いで北門に攻めた。砲兵は撫署と督練公所を砲撃し、歩兵は城東の北角を、騎兵は城西の北角を攻撃した。

しかし、城内で呼応し、城門を開けることになつていた薛哲は蜂起直前になつて恐れをなし、任務を果たさず、また、工程營の範伝甲も監視が厳しいため城内で呼応することができなかつた。城内での呼応の失敗と、彈藥の不足は城外の蜂起軍をして撤退を余儀なくさせた。また、翌日には演習参加軍および長江水師も清朝の援軍として間近に迫まり撤兵の指示が下された。熊成基らは、殘兵を率いて合肥に逃れて、再び兵を挙げることを計画したが、合肥への逃走の途中、清軍の攻撃を受け壊滅状態となり、やむなく熊成基は日本へ逃れることになつた。薛哲・範

伝甲・張勁夫らは処刑された。

ここに、熊成基蜂起も徐錫麟蜂起と同様、当初の目的を達成することなく、失敗に終わった。

両蜂起の失敗の原因は、周到な計画を欠いた盲動的・一揆的な蜂起にあったといえる。革命をとりまくあらゆる敵しい環境を考慮するならば、一揆主義もやむをえなかったであろうが、各地に存在した革命組織の横の結合を主軸とした武装蜂起が何故実現できなかったのであるうか。無論、発覚を防ぐために、水面下での活動を要求される革命集団にとって、全面的な提携・組織化は不可能であった。しかし革命の成就を目指す同一集団として、同時挙兵を実現するという横への連結さえ不可能だったのであろうか。徐錫麟蜂起をみると、参加したのは、すべてが光復会の会員であり、同盟会とのつながりは見られない。革命母体であった同盟会はその成立当初より、各団体の軋轢が顕著で、革命基盤は強固ではなかった。各団体の独自性が革命よりも優先していた。安徽省の革命組織もまた、その傾向をまぬがれることができなかったといえよう。

二 光復の経緯

ここでは、辛亥革命時の安徽省各地での独立過程を見ながら、その性格を明らかにしてみようと思う。

省都が置かれていた安慶では、武昌蜂起の消息が伝わると、新軍による光復の声が次第に高まった。これにたいし巡撫朱家宝は、革命的傾向の強い各營の弾薬を没収したり、武漢革命軍の東下を防禦するという名目で英山に派遣するなどして、新軍の力の分散をはかった。⁽¹⁷⁾

全国的に革命が高揚するなか、安慶では、十月三十日、同盟会員吳春陽・管鵬・韓衍らが、安慶の萍荃樓旅館で挙兵を謀議、その夜蜂起を執行する手はずが整えられたが、事前に計画が漏れ朱家宝によって革命軍は解散させら

れた。⁽¹⁸⁾ここに革命派はその勢いをおおきくそがれることになった。しかし、長江流域では十月二十四日、九江が獨立し、次いで十一月三日、上海で武装蜂起が起こり、四日には杭州、五日には蘇州が獨立し、さらに省内では五日に、寿県が獨立した。このような状況のなかで、諮議局長費以穀ら立憲派は朱家宝に対して獨立を宣言するよう説得し、十一月七日には諮議局は自ら獨立することを決意、軍事・警務・財政の重要なポストを諮議局議員が掌握し、都督の決定は、朱家宝自身の選択に委ねられた。⁽¹⁹⁾時に朱は袁世凱の密電を受け、時勢に応じて対処せよという旨に抛りて、諮議局からの獨立宣言の建議を受け入れ、八日、獨立を宣言し、朱は自ら都督に就任した。⁽²⁰⁾

寿県では、はやくから革命活動が行なわれ、前述の養蒙学堂や芍西学堂は、革命意識培養の一翼を担った。⁽²¹⁾この地は一九〇六年以来、東京の同盟会本部より派遣された張匯滔らによって、革命活動が本格化した。彼らはまず、信義会という名称で会員を吸収して革命活動を行ない、實質的には同盟会支部として機能していた。一九〇七年には組織の実体が漏洩し、信義会を寿州農会と改組して革命活動を継続した。また同時に郷団の支援をもとりつけ、その勢力を拡大した。⁽²²⁾武昌蜂起のニュースが伝わり、張匯滔・王龍亭・岳相如・袁子金・徐石君らは、十一月五日の夜の武装蜂起にむけて、鳳台・定遠・鳳陽・懷遠の各県と連絡をとり、発動することに決定した。しかし十一月四日、武器を隠し持って城内に潜入した孝篠然・張綸らが計画よりもはやく兵を挙げ、それにあわてた清軍および文武官吏の逃亡によって、翌五日、張匯滔らの指揮する革命軍は難なく入城し、獨立を宣言するにいたった。光復の翌日、寿州に王龍亭を総司令、張石泉・袁子金を副司令とする淮上軍司令部が成立した。⁽²³⁾

安徽省のほぼ中央に位置する合肥には、吳春陽・王兼之・胡渭清ら進歩的な知識人も多く、同盟会員による組織活動も辛亥革命以前から比較的活発に行なわれていた。合肥出身の吳春陽はここに合肥学会などの各種学堂を設け、革命活動を行ない、とくに教育方面の重要な地位を占めるようになった。⁽²⁴⁾当時の合肥は、巨紳李国松なる人物を中

心にした反革命勢力もあったが、呉春陽らの工作活動により、革命派にとって次第に有利な条件がつくりだされていった。⁽²⁵⁾

そのひとつは武昌蜂起の前、上海の同盟会支部より合肥に派遣されていた孫品驤が、他の同盟会員とともに、民軍を組織し、蜂起の準備を開始したことであり、また南京・蕪湖・安慶等にいた学生も続々と合肥に集結し、独立へ向けての動きが一層高まったことである。かくて反革命の巨頭李国松は上海に去り、廬州府知府穆特恩も李に続いて合肥を逃亡した。また、李によってつくられていた民団も、彼らの退去によって革命派に傾き、府營隊の内部でも敢死隊が組織されるにいたった。このため、合肥知県李維源・合肥江防營管帶李光恩も最終的には革命派へ賛同の立場を表明した。⁽²⁶⁾

十一月九日の午後、同盟会員は全員を招いて合肥天後宮広場で大会を挙行し、孫品驤を総司令とすることに決定、これに続き、合肥大書院で軍政府を成立させた。⁽²⁷⁾

蕪湖は、革命派の活動がもっともはやくから展開されたところである。しかし、一九〇七年以降、革命派の中心人物は弾圧のために相継いでこの地を離れていたため、武昌蜂起に続こうと独立の声は高まっていたが、指導者が存在しなかった。しかし、呉振黄が上海から、劉醒吾が武漢から派遣されて蕪湖にいたり、工作活動に従事するや瞬く間に革命の気運は高まった。その上、蕪湖海関道李宝林や蕪湖知県朱綉封も革命に賛同の意をあらわしたために、蕪湖は清朝側の何の抵抗も受けることなく、光復を実現させた。⁽²⁸⁾十一月十日、独立が宣言され、蕪湖大戲園に軍政府が成立し、総司令に呉振黄が任ぜられた。⁽²⁹⁾

以上、安徽省の主要な都市における光復をみてきた。この地域における独立は、武昌光復に触発されて展開し、ほとんど武力衝突なくして行なわれた無血の解放であった。

しかしながら、各地域が個別に独立を宣言し、軍政府を成立させたために、逆に安徽省の三省規模での統一を困難にさせる結果を招くことになった。

蕪湖において早くから活動を開始した岳王会も、その主旨は反清革命を標榜した秘密結社であり、『安徽俗話報』に見られるように、西洋をモデルとした近代国家の創出を目標とした。⁽³²⁾しかし、入会の宣誓式等をはじめその実体は、伝統的・封建的慣習の規範の延長線上にあり、西洋の近代思想に立脚した革命とは相反する構造を同時に内包させていたのである。

柏文蔚は自叙伝「五十年経歴」のなかで、この岳王会のことに触れ次のように述べている。

会員の入会は、俠客がやるような宣誓の方式をとり、秘密は絶対に守った。⁽³³⁾

岳王会が伝統的な秘密結社の性格を多分に残していたことを実証している。

すなわち、現実にはこのアンバランスこそが、革命派が内包していた致命的な欠陥であり、一時的には革命派の紐帯を強固なものにさせはしたが、組織を發展させていく過程において、各団体の連合を極めて困難にさせた。局的・小規模単位での会党的組織化は、一面では中国の伝統的な「任俠」意識により、革命派の組織基盤をゆるぎないものにし、官憲の目を逃れての地下活動を容易にし、限られた範囲内での革命化を増幅させた。反面、このような組織は、非常に狭隘な「任俠」意識に根ざしたものであったために、他の組織、とりわけ地域を異にした組織との結びつきを困難にし、孤立・分散的なセクト主義へと走らざるをえなかった。このことは、都督争いによって、より表面化することになる。

三 都督問題に關して

前章であきらかにしてきたように、省都が置かれていた安慶をはじめとして、各主要都市はほとんど武力衝突を見ないまま無血で光復された。しかしそれぞれの地域に独自に成立した軍政府は、その後も各々個別に存在し、とりわけ安徽省の都督の座をめぐるは骨肉の争いを見せ、革命派自らがその内部に共有していた諸矛盾を曝け出すことになる。

十一月八日、安慶でも独立が宣言され、諮議局の推薦を受けた朱家宝が都督におさまった。ところが翌十一月九日には、武昌より都督を受け継ぎに来たと自称する王天培が、朱家宝に対して都督の職を明け渡すように迫った。⁽³⁴⁾これにより本格的な都督争いが開始される。以前から安慶を離れたいと考えていた朱は、ただちに諮議局をとおして王に公印を渡したが、王は人々に辮髪を切り落とすことを強要したことで民衆の怒りに触れ、たった半日にしてまた諮議局によって都督の座を追われてしまった。結局、朱家宝が都督にもどったが、⁽³⁵⁾朱の都督の権限は有名無実と化し、安慶地方の秩序は、実質的には巡警道方耿環の武力によって維持されていた。⁽³⁶⁾

時に、六十二標教練官であった劉国棟が一部の新軍を率いて巡警衙門を包囲し、方耿環を追放して都督と称した。一方、陸軍測繪学堂の胡万泰も学生百人余りを率いて巡撫衙門を包囲し、朱に交印を迫り、自ら同盟会派遣の安徽都督と称し、安徽軍総司令の名義でもって安民の布告をするにいたった。ここに、朱家宝・劉国棟・胡万泰と三人の都督が出現したことになる。⁽³⁷⁾

この難局を打開するため、呉春陽は江西九江軍政府都督馬毓宝に派兵を乞い、それを受けた馬は、江西九江軍旅長黄煥章に兵二千を率いて安慶に向かわせた。十一月十四日、黄が安慶に到着すると、身の危険を感じた朱はすぐ

に遁走した。黄は安慶の一切の軍政を掌握することを宣言して都督の座に就いた。⁽³⁸⁾しかし、黄の率いる軍隊は規律が乱れ、略奪を繰り返し、抗議に來た呉春陽までを殺害したため、諮議局は英山に駐していた新軍を呼びもどし、武力でもって黄を放逐しようとはかり、⁽⁴⁰⁾安慶はまた、光復以前の一触即発の危機に陥った。

これを知った江西九江軍政府都督馬毓宝は新たに江西九江軍政府參謀総長李烈鈞を安慶に向かわせた。十一月十八日、安慶に到着した李は、和解工作にあい努め、まもなく黄は安慶を去り、あらたに都督として李が推挙されることになった。⁽⁴¹⁾一応ここに事態收拾がはかられはしたが、李はすぐに都督の職を辞して、この地を離れたため、都督は空席のままとなった。十月二十二日にいたり、上海の同盟会本部は孫毓筠を都督とすることを決定し、二十三日、その命を受けた孫が安慶にいたり都督の座に就き、安徽軍政府の成立を宣言した。⁽⁴²⁾

孫毓筠が都督に就任したことで、安徽は光復の後、ようやく安定した状態となったが、南京にいた柏文蔚が都督の座に触手をのびしたことで、また事態は一変し、都督問題はさらに深刻化し、革命派が内包していた弱点を露呈することになった。

柏は安徽都督獲得を画策し、孫はアヘンを吸い、職務怠慢等のデマを流し、著しく孫の人格を誹謗した。更に、柏は孫の片腕であった韓衍にも攻撃の的を絞り、皖籍を持たない韓衍を斥けるため「皖人治皖」のスローガンを掲げた。⁽⁴⁴⁾

一方、戸籍問題を取沙汰された韓衍はすぐに安徽籍を取り、自ら主筆を務めていた『安徽船』誌上において柏に激しく攻撃を加えた。かかる争いを通して、安慶の革命組織は、以下の八グループに分裂することになった。⁽⁴⁵⁾（別表2）

柏文蔚と孫毓筠との都督争いは、その後、柏が都督に就任することで決着がついた。柏が送ったと言われる暗殺

別表2 都督争いにより分化したグループ

	組織名	組織者	原籍
1	社会党	吕大任	阜陽
2	統一党	姚愚	寿州
3	工党	洪夢揆	皖南
4	平民党	韓衍	江蘇
5	保安会	葉松山	懷寧
6	進化党	範国	太和
7	自由党	高介	太和
8	国民党	管鵬	寿州

者によって韓衍が殺害されたことと、柏の軍事力の前に、孫は都督の座を譲らざるをえなかった⁽⁴⁶⁾。柏が都督についたことにより、都督問題は終焉したが、柏が都督に就任するまでの経緯を見る限りにおいて、革命派内部の対立・統一性の欠如が鮮明にうかびあがってくる。

この柏文蔚と孫毓筠の都督争いには、孫文も手を焼いたようだが、話し合いで円満に解決するようにと打電したにとどまり、事態を收拾することはできなかった。このことは、革命の本体である同盟会中央の指導力のなさを示すものであり、革命実践の場である地方の自立性とともに、革命派の統一を一層困難にさせた。

各組織における孤立化の深まりは、集団内部での結束をより強固にしたが、集団外部の者とは、たとえそれが革命を目指す同一集団であっても、両者の溝を深め、排他性を高め、革命集団としての統一的機能を麻痺させる結果を招いた。

革命を成就させるための必要不可欠な要素は、何よりもその組織基盤を強化することであったことはいうまでもない。しかし、その機軸となるべく組織が整備されないうちに、武装蜂起のみが先行したのである。これでは、いかに高邁な革命理論にささえられた行動であっても、現実には従来の農民蜂起の範疇をなんら越えるものではない。国家統一へ向けての共通の理念さえ持ち得なかった彼らが、清朝転覆後、強大な反革命勢力を前におしつぶされていったのも、当然の帰結であったといえよう。

むすびにかえて

徐錫麟蜂起・熊成基蜂起からはじまり、各地の光復にいたるまで革命派の活動はほとんど孤立分散的に行なわれ、また孫・柏らの都督争奪に象徴されるように、革命派は全く有機的な結合をすることができなかった。このことは、革命派が西洋の近代思想に立脚し、ブルジョア民主主義革命を標榜しながら、なお基本的には中国の伝統思想のひとつである宗族的・同郷的意識から脱却できないことを示している。二千年におよぶ専制君主支配を打倒したにもかかわらず、辛亥革命が短時日で失敗に終わった原因は、一般規定として、立憲派との妥協・反帝国主義を鮮明にできなかった等の政策上の問題が指摘されるが、革命失敗の根本要因は、やはり革命派による結合の脆弱性に求められるのではないだろうか。

注

- (1) 東亜同文会調査編纂部著『支那開港場誌』（東亜同文館、一九二四年）第二卷、揚子江流域、蕪湖 八〇三—八〇九頁。
- (2) 名は德膏、光炯は字、安徽省桐城の人。
- (3) 政協安徽省委員会文史資料工作組「辛亥革命安徽文教界的革命活動」（中国人民政治協商會議全國委員會文史資料研究委員會編『辛亥革命回憶錄』四、文史資料出版社、一九八一年）三七七頁。
- (4) 字は暘谷、安徽省合肥の人。
- (5) 蕪湖にかかわる以上の記述は、政協安徽省委員會文史資料工作組「辛亥革命安徽文教界的革命活動」（前掲『辛亥革命回憶錄』四）、安徽科學分院歷史研究室近代史組調査、沈寂整理「蕪湖地区的辛亥革命」（『安徽史學通訊』、一九五九年、第六期）、高一涵「辛亥革命前後安徽青年學生思想變遷的概況」（前掲『辛亥革命回憶錄』四）などによる。
- (6) 陳独秀主筆によるこの『安徽俗話報』は、一九〇四年二月から翌年八月まで二十二期が出版され、啓蒙雜

誌として高く評価された。拙稿「辛亥革命以前の陳独秀」(『仏教大学院研究紀要』第十五号、一九八七年)参照のこと。

(7) 字は藩侯、安徽省寿州の人。

(8) 岳王会に関しては、常恒芳「記念慶岳王会」(前掲『辛亥革命回憶録』四)、沈叔「辛亥革命時期的岳王会」(辛亥革命史研究会編『辛亥革命史論文選』上冊、三聯書店、一九八一年)などを参照。

(9) 政協安徽省委員会文史資料工作組「辛亥革命前安徽文教界的革命活動」(前掲『辛亥革命回憶録』四)、高一涵「辛亥革命前後安徽青年學生思想變化的概況」(同前書、四)などにより作成。ただし、空白部分は詳細不明。

(10) 徐錫麟および徐錫麟蜂起については、主として陶成章「浙江紀略」(中國史学会主編、中國近代史資料叢刊『辛亥革命』七、上海人民出版社、一九五七年)、章炳麟「徐錫麟陳伯平馬宗漢伝」(同前書)、凌孔彰「徐錫麟安慶起義紀実」(前掲『辛亥革命回憶録』四)などを参照とした。

(11) 俞廉三、字は虞軒、浙江山陰の人。一九〇二(光緒二十八年)年より、翌一九〇三年に病没するまで山西巡撫を務めた。この時、山西知府の職にいたのが恩銘で、俞廉三はこの恩銘の師にあたる。

安徽の辛亥革命覚書き

(12) 凌孔彰「徐錫麟安慶起義紀実」(前掲『辛亥革命回憶録』四)三九八頁。

(13) 熊成基および熊成基蜂起にかかわる記述は、陳春生「成申熊成基安慶起義記」(前掲『辛亥革命』三)、錢兆湘「熊烈士供詞」(同前書)、楊士道「熊成基安慶起義的回憶」(前掲『辛亥革命回憶録』四)、張煥彤「熊烈士成基皖省起義記」(丘權政・杜春和選編『辛亥革命資料選輯』上冊、河南人民出版社、一九八一年)などによった。

(14) 楊士道「熊成基安慶起義的回憶」(前掲『辛亥革命回憶録』四)三九九頁、陳春生「成申熊成基安慶起義記」(前掲『辛亥革命』三)二二九頁。

(15) 楊士道「熊成基安慶起義的回憶」(前掲『辛亥革命回憶録』四)四〇〇頁。

(16) その内容は「作戰密令十三条」といわれる。全容は次のとおりである。

1、反革命の部隊は、西門の外に駐する水師一營、北門附近に駐する巡防一營、城門内外の火藥庫に駐する巡防二隊、撫院および各衛門の衛隊およそ二隊である。

2、十一月一九日午後十時、一斉に拳兵し、城内外の彈藥庫を占領した後、全隊が入城をめざし、翌午前五時、五里廟で会し、次の命令が下るのを待って、

再出発する。

- 3、第一標と第二標第三營は、先ず北門の外にある彈藥庫へ向かい、彈藥を奪う。その後、第一標の第二・第三營は入城し、城内各營の水師營にたいする攻撃を助力する。水師營が投降した場合は帰服させ、投降しない時はこれを潰滅し、武器を押収する。第二標第三營が彈藥庫を守る。
- 4、第二標第二營と工程隊は軍械局で彈藥を奪い、工程隊は軍械局を守備する。第二標第二營は、二部隊でもって巡防營を攻め、一部隊は西門を開け、馬營を入城させる。次いで北門を開けて、その場に駐す。残りの一部隊は撫院を攻撃する。
- 5、砲營は、馱馬の厩舎に火を放ち、蜂起の合図を全員に送った後、北門外の陸軍小学堂で武器を奪い、一部隊は南門を守り、二部隊は市中を巡邏する。
- 6、馬營は西門より入城し、軍械局で彈藥を奪取し、一部隊が西門を、別の一部隊が東門を守る。残りの二部隊が電報局を占拠する。
- 7、輜重隊は、軍械局で彈藥を奪い、教会および外国人の保護にあたる。
- 8、講武堂の学生は、負傷兵の保護・治療にあたる。
- 9、各兵士の論功行賞は、翌日の朝行う。
- 10、兵士および民間人で略奪をはたらく者は、巡警隊

が軍法に照らして、随時に処罰する。

11、巡警兵で投降する者は、砲兵に編入し、市中を巡邏する。

12、各文武衙門の官吏をむやみに殺害してはならない。
13、藩司衙門への出入りを一切禁止する。

『民立報』一九二二年一月十四日「熊烈士承基供詞」、十五日統「熊烈士承基供詞」による。

(17) 孫伝瑗「安徽革命紀略」(中華民國開国五十年文獻編纂委員會『中華民國開国五十年文獻』第二編、第四冊、安徽光復、正中書局、一九六四年)二六〇頁。

(18) 管鵬「安徽革命紀実」(前掲『中華民國開国五十年文獻』第二編、第四冊、安徽光復)二五五〜二五六頁。

(19) 孫伝瑗「安徽革命紀略」(前掲『中華民國開国五十年文獻』第二編、第四冊、安徽光復)二六一〜二六二年文獻。頁。

(20) 同前、二六二頁。

(21) 政協安徽省委員會文史資料工作組「辛亥革命文教的革命活動」(前掲『辛亥革命回憶錄』四)三八四頁。

(22) 政協安徽省委員會文史資料工作組「淮上軍革命実録」(前掲『辛亥革命回憶錄』四)四一七〜四一八頁。

(23) 同前、四一九〜四二〇頁。

(24) 吳春陽が堂長を務めていた城西学堂は、教師が全員

同盟会員であった。この他、合肥の主な学堂の学長や教師、教育会々長もほとんどが同盟会員で占められていた。龔嘯雲「辛亥前後合肥的革命活動与軍政分府の成立」(前掲『辛亥革命回憶録』四) 四二二頁。

(25) 同前、四一三頁。

(26) 同前、四一四〜四一五頁。

(27) 『民立報』一九一一年十一月十五日「專電」、二十三日「蕪湖通信」。

(28) 徐錫麟蜂起の後、安徽公学等の革命勢力に対する弾圧が強まり、多くの革命派は蕪湖を離れ、一時的にその勢力を後退させた。安徽科学分院歴史研究室近代史組調査、沈叔整理「蕪湖地区的辛亥革命」(前掲『安徽史学通訊』、一九五九年、第六期) 七四〜七五頁。

(29) 同前、七六〜七七頁。

(30) 『民立報』一九一一年十一月二十日「蕪湖光復記」(一)。

(31) 柏文蔚「五十年経歴」(中国社会科学院近代史研究所近代史資料編輯組編『近代史資料』、中華書局、一九七九年、三期、総四〇号) 八頁で、柏文蔚は岳王会のことに触れ「岳武穆は遠金に抵抗し、死んでも変わらなかつた。我々はその志を継ぎ、排滿に力を尽くした」と記している。反清の革命組織としての性格を明らかにしている。

安徽の辛亥革命覚書き

(32) 岳王会々長であった陳独秀は『安徽俗話報』の論説

「悪俗篇」・「亡国篇」・「瓜分中国」等のなかで、国家滅亡の危機を強く訴え、西洋を理想とした近代國家への移行を提唱している。岳王会的主旨もこれに近いものであったと推測される。

(33) 柏文蔚「五十年経歴」(前掲『近代史資料』、一九七九年、三期、総四〇号) 八頁。

(34) 郭考成「安徽光復記」(前掲『辛亥革命』七) 一七五頁。

(35) 同前、一七五頁。

(36) 王一民「安徽光復經過与都督的争奪」(前掲『辛亥革命回憶録』四) 四〇四頁。

(37) 同前、四〇四頁。

(38) 孫伝瑗「安徽革命紀略」(前掲『中華民國開国五十年文獻』第二編、第四冊、安徽光復) 二六二頁。

(39) 『民立報』一九一一年十二月九日「吳畢二君之痛史」,「吳烈士場谷革命史」(前掲『辛亥革命』七) 一九三〜一九四頁。

(40) 王一民「安徽光復經過与都督的争奪」(『辛亥革命回憶録』四) 四〇七頁。

(41) 「安慶各界李烈鈞為都督電」(前掲『中華民國開国五十年文獻』第二編、第四冊、安徽光復) 二七一頁、孫伝瑗「安徽革命紀略」(同前書、第二編、第四冊、

安徽光復」二六三頁。

(42) 孫伝瑗「安徽革命紀略」(前掲『中華民國開国五十年文獻』、第二編、第四冊、安徽光復)二六三頁。

(43) 字は著伯、江蘇丹徒の人で同盟会員。辛亥革命前、袁世凱幕下にもぐり込み、スパイ活動にたずさわり、事が発覚して、一時妻の紅葉とともに日本に逃れていたが、辛亥革命の直前、偽名を使って安慶に入り革命工作に加わった。安慶では新聞『安徽船』を発行するなど、この地域の革命勢力培養に功績のあった人物の

一人である。王一民「安徽光復經過与都督的争奪」

(前掲『辛亥革命回憶録』四)四〇七、四〇八頁。

(44) 同前、四〇八頁。

(45) 同前、四〇九頁。

(46) 同前、四〇九頁。

(47) 同前、四〇八頁。

(文学研究科博士後期課程・東洋史学専攻)